

ヴィトゲンシュタイン哲学、手引き——或るバージョン

丸 田 健*

Wittgenstein's Philosophy, A Guide — One Version

Ken MARUTA

要 旨

本稿は講演用原稿を基に書かれたもので、ヴィトゲンシュタイン哲学の要所と筆者が考える論点を提示することで、彼の哲学の基本理解（の一バージョン）を簡易に伝えることを目指したものである。本稿の内容を以下に示す。(1)前期著作には「意味の像理論」があり、言語は言語外的な世界に根拠づけられ、それとの対応によって意味を持つと考えられた。(2)後期思想では、言葉の文法には自律性があり、それは言語外的な根拠を持つのでない、と考えられるようになった。そして文の意味は世界との対応でなく、実践における使用に求められる。(3)後期思想では言語ゲームの「規則」の概念が重視されるが、他方規則で説明しがたい「二次の意味」の概念への着目もある。心的体験の記述の言語ゲームを展望する際にはこの観点が必要になってくるが、この観点は後期思想で完全には展開されていないと思われ、そのさらなる検討がヴィトゲンシュタイン哲学の理解、および解釈の発展のための課題となる。

キーワード：意味の使用説、規則、二次の意味、比喩的拡張

I はじめに[†]

ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) という哲学者がいます。言葉の意味や理解について考えた言語哲学者です。ヴィトゲンシュタインが生まれたのは1889年、没年は1951年です。ウィーンのユダヤ系鉄鋼大富豪の家庭に育ち、ケンブリッジ大学で哲学の才能を見出され、第一次世界大戦従軍後に全財産を放棄しました。ウィーンと行き来しながらも、ナチスドイツによるオーストリア併合を機にイギリス国籍を選び、最後はケンブリッジで亡くなりました。20世紀を代表する哲学者の一人で、ヴィトゲンシュタイン哲学に関する研究・出版は21世紀初頭の現在も途絶える様子がありません。彼の「著作」は多数ありますが、代表作として二つの書物を残しました。ヴィトゲンシュタインの文体は簡潔で、特に後期哲学は専門用語もないため、文章は難しくありません。ところが彼の著作の内容を理解することには、独特の難しさが伴います。彼の哲学がどういうものなのか、様々な制約の中で今回十分に説明することは

もとより不可能ですが、私に重要と思われる事柄を中心に、できるかぎり直截的かつコンパクトに紹介したいと思います。

ヴィトゲンシュタインはイギリスで暮らし英語を操りましたが、哲学をするときには基本的に母語のドイツ語で書いています。母語でないと、自由な思考ができなかったようです。彼の哲学作品はイギリスの出版社から出されており、多くは初刊時、原語のドイツ語と英語訳の対照形式で出版されています（そうでないものもあります）。代表作は、前期の『論理哲学論考 (Logisch-Philosophische Abhandlung / Tractatus Logico-Philosophicus)』と後期の『哲学探究 (Philosophische Untersuchungen / Philosophical Investigations)』です。『論理哲学論考』(略称『論考』)は、ヴィトゲンシュタインが30代前半のときに出された短い作品です。1918年に完成しましたが、1921年に専門誌にドイツ語で多くの誤植・不備とともに掲載され、翌年に独英対訳版で書籍として適切に出版されました。この本によって彼は哲学の問題が全て解けたと大胆にも考え、哲学を去りますが、この作品は論理実証主義者と呼ばれる人々に大きな影響を与えました。後期の『哲学探究』(略称『探究』)は、哲学をいったん去ったヴィトゲンシュタインが40歳を目前に哲学に復帰したあと、長い年月をかけて準備し続けた原稿を、彼の死後1953年に、弟子たちが出版した書物です。こちらは最初、当時勢いがあったオックスフォード大学の日常言語学派との関連で読まれる傾向がありました。しかしヴィトゲンシュタインの著作はその独自性がますます明らかになるにつれ、特定の学派との関連においてではなく、「ヴィトゲンシュタイン哲学」というそれ自体のジャンルを成すものとして研究が行われるようになりました¹⁾。

ヴィトゲンシュタインの著作は、通常の手紙のような直線的な展開をしないため、彼の作品を理解することは、通常の手紙体験とかなり異なります。彼の作品は、推敲を重ねた断片的文章の羅列になっており、それらの諸断片が互いに照応して様々な読みを可能にするため、全体として何を述べているのかが、非常に分かりにくいのです。彼の執筆方法も独特でした。つまり彼は、まず大小のノートに手書きで文章を書き込み、それらが溜まり、思考が整理されてくると、それをタイピストに口述してタイプ原稿を作らせました。そしてそこに書き込みをしたり、切り貼り・並び替えをしたりして加工し、そこから次のタイプ原稿を作ることをしました。そしてその原稿にも満足せず、また新たな原稿を始めるという作業を、彼は幾度も繰り返したのです。そのように書き残された遺稿群から、遺稿管理人に選ばれた弟子たちの判断で、主著以外にも多くの書物が編集され出版されています。出版が進むにつれ、研究者たちから、遺稿管理人の編集方針に対する疑義、また遺稿公開の要望も生まれます。結果、「ヴィトゲンシュタイン遺稿研究」が開拓・整備されることになりました。その成果として、遺稿群はすべて目録化され、また様々な表記的工夫の上、電子データ化も実現されています。現在電子データはインターネット上で公開されています。遺稿は、ケンブリッジ大学のレン図書館を中心に保管され、それはユネスコの「世界の記憶 (Memory of the World)」に登録されています。遺稿の他に、授業の講義録、彼が交わした手紙も出版されています。現在は、主著を中心に、それ以外の著作、また残りの遺稿、講義録、手紙類、そして研究者による多くの研究文献を利用しつつ、ヴィトゲンシュタイン研究が行われています。

ヴィトゲンシュタイン哲学は、その解釈について、研究者間の違いが大小多々あります。今回

は、彼の哲学の入門的な紹介から始め、次第に私の解釈も提示しながら、私の考える一つの簡略的な全体を示したいと思います。参照するのは、主には二つの主著である『論考』と『探究』です。ヴィトゲンシュタインの哲学は、言葉の「本質」、言葉の意味や理解が、前期・後期に流れる大きなテーマなので、その点を中心に提示していきます。解釈上の種々の論争に分け入ることは避け、ヴィトゲンシュタイン哲学の読みの、一つの、粗い見取り図を示したいと思います²⁾。触れられていない概念やテーマは少なからずありますが、それらは本稿の観点・目的、また制約からすると、差し当たり後回しにできると考えられたものです³⁾。

II 『論理哲学論考』の考え

前期著作の『論考』には七つの基本命題があります。そしてそれぞれに対するコメント、またコメントに対するコメント、それに対するさらなるコメントが次々に加わるという入り組んだ形で全体が構成されています。基本命題7つを含め、合計526個の所見(文章の塊)があります。

前期ヴィトゲンシュタインの言葉についての考えは、研究者たちによって「意味の像理論 (Bildtheorie der Sprache / picture theory of meaning)」と呼ばれています。これは、言葉の本質は事実描写の機能にあり、言葉は事実を写生画のように写し出すものだ、とする考えです。前期ヴィトゲンシュタインは世界を、諸々の存在物の単なる寄せ集めではなく、存在物が組み合わせさって作られる「事実」を集めたものと捉えます。そして文のひとつひとつは——いわば絵画的な像のように——そういった事実を写し出すものとされます。ただしどの文であれ、それが述べる内容には偽りの可能性もあります。したがってより正確には、文が表すのは、可能性としての事実だと言わねばなりません。文が述べていることが実際成り立っているかどうかは、現実との照合で分かることです。このように事実の可能性の全体として考えられる世界があり、その可能性を余さず捉えるのが言語であり、言語の本質はそれ以上でも以下でもない、というのが前期の考えです。

たとえば猫がテーブルのうえにいる (a cat is on a table) という事実を考えてみます。この事実を描写するには、その事実に登場する物が像に反映されて登場するだけでなく、それらの関係も像に反映される必要があります。下図に、像の例があります。①は通常の意味での像です。②は、事実に登場する動物と家具をそれぞれ「cat」と「table」という語で表し、その位置関係は言葉ではなく視覚的・空間的に表しています。③は、猫とテーブルの関係も「-- is on --」という言葉に変換し、すべてを言語的に表しています。①、②、③はすべて、同じ事実の像であるという共通点があります。何かが事実の像であるには、事実を構成する物と、像の構成要素が対応し、また物同士の関係は像の要素同士の関係に対応している必要があります。文も一種の像として、そ

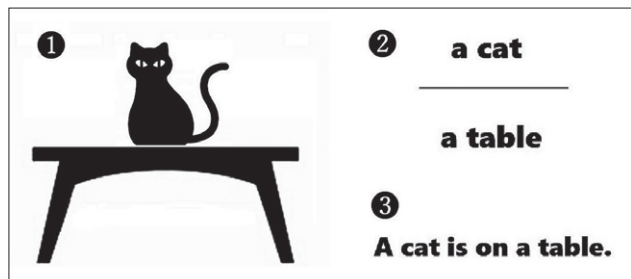


図1 像

れが描写する事実の構造を文自体に適切な仕方で反映していることによって、事実を描写することができるのです。以上のように、ヴィトゲンシュタインの「像の理論」の基本的考えは、文の意味はそれが記述する事実であり、語の意味はその指示対象である、というものです。

付言しておけばヴィトゲンシュタインは、事実はそれを分解すると究極的には最小の対象から成る最小の事実に行き着くだろうという、原子論的な考えをします。したがって世界を写す文も、究極的には最小の事実を表す文に分析できるとしました。そのような文を「要素文」と言いますが、それらの要素文を論理的に結合して作りうる文の全体が、言葉の全体であり、それは世界の可能性の全体を表すのだ、と考えました。このように彼は、言葉の意味は、世界の可能性の像的記述に尽きると考えました。この考えでは、言語は世界の構造を反映するものであり、その意味で言語は世界に従属しているのです。前期のヴィトゲンシュタインにとって、言葉を理解するとは、世界の中ではどんな事実が成り立ちうるか、その可能性を理解していることです。ヴィトゲンシュタインは、哲学の問題は、以上のような言葉のはたらきを誤解し、そのはたらきを越えて何かを語ろうとすることから生じる、と考えました。

さて言葉の機能をそのような事実描写に限定すると、従来受け入れられてきた多くの「文」が有意味さの条件を満たさないこととなります。たとえば哲学は伝統的に、神やアイデアや物自体に関する、形而上学的問題を考えてきました。しかしそこで使われる哲学用語は、現実世界におけるどんな実在にも対応しません。世界の事実を描写することにおいて文が意味をなすなら、形而上学的命題は意味をなさないこととなります。ヴィトゲンシュタインは伝統的哲学の諸命題は無意味——ナンセンス——だとして言葉から追放することで、哲学の問題をすべて解消できたと考えました。しかし他方で問題も起こります。言葉が世界と対応関係がある事実だけを表すなら、例えば倫理学や美学の命題はどうなるのでしょうか。そこで登場する「善」や「美」といった言葉が、何を具体的に指示しているかは定かではありません。それゆえヴィトゲンシュタインは、倫理学もナンセンスだとしました。ただし彼は、倫理は言葉では表せない神秘的なものだと敬意を払ったのであり、(倫理を含む)「語るができないものについては、沈黙しなければならない(『論考』7)」という、有名な言葉を残したのです。

言葉は世界を写し出すものであり、世界との対応がない命題は無意味である、という考えは、科学的世界観を持つ論理実証主義者に受け入れられました。他方、ヴィトゲンシュタイン本人は、『論考』によって哲学的問題に終止符を打ったと考え、哲学から離れました。彼はまた、『論考』の諸命題自体も(事実描写的でないがゆえ)ナンセンスだとして、読んだ後は、切り切った梯子のように『論考』を捨て去るべきだとしました。こういったことを述べる『論考』の言葉は、多くの人の関心を捉えてきました。しかしそれは『論考』の言葉が、ヴィトゲンシュタインが言うようにはナンセンスではなく、そこに意味が見いだされるからではないのでしょうか。それをナンセンスだとする『論考』の言語観には、無理があるのでないかと疑われます。同じ疑問は、『論考』が無意味とする論理的、宗教的、美学的な言説についても、当てはまります。自然科学が扱うような物質的事実を描写する言葉にしか、意味を見出すことはできないのでしょうか。前期の「像の理論」に基づく言語観は一見手堅いものですが、それが説得的な見方かどうかについて、明らかに疑問が残ります。

III 『哲学探究』の考え

1. 言語ゲーム

『論考』の完成から約10年後に哲学に戻ったヴィトゲンシュタインは、前期思想には欠陥があると考えようになり、後期思想が徐々に練り上げられていくことになりました。前期と後期の関係をどう考えるかについては研究者間で解釈が分かれますが、後期のヴィトゲンシュタインは少なくとも前期とは大いに異なる言語観を取ることになりました。それは大雑把に言えば、言語の根拠を、言語とは独立の世界に求めることをしない「言語の自律性」の言語観、かつその多様性を重視する言語観、です。

『探究』の冒頭第二節では、言葉を使った単純なコミュニケーションが導入されます（因みに『探究』は二部構成になっており、第一部では、通し番号が付いた文章の塊が693個、平板に並べられています。第二部については後で触れます）。『探究』冒頭のやり取りは大工と助手が登場するもので、彼らは数種の石材を使った建築作業をしています。彼らのボキャブラリーは限られており、それらは「台石」「柱石」「板石」「梁石」の四語だけです。そして大工が四語のいずれかを叫ぶと、助手が適切な石材を運んでくるのです。この単純な言語的やり取りにおいて、単語は意味ある仕方では使われていると言えるでしょう。さらに言えるのは、大工たちはこの原初的な言葉で事実描写をしているのではあるまい、ということです。ここでヴィトゲンシュタインは、大きな点で前期とは違う仕方では言葉を考えています。つまり『論考』で彼は、事実を映すだけのいわば鏡の静的イメージで言語を捉えていたとするなら、後期は言語使用を、活動を伴う動的イメージで捉えようとしています。これを巧みに表すのがゲームの比喩です。チェスは盤上で駒を動かして行われるゲームですが、言葉話すことも、言葉という駒を使ってゲームをするようなものだと言えられます。このような言語の捉え方は「言語ゲーム (Sprachspiel / language-game)」論という名前で知られています。大工と助手の単純なコミュニケーションに限らず、言葉を操ることはみな、言語ゲームに携わることと見なされます。

2. 意味の使用説

言語ゲーム論を通し、ヴィトゲンシュタインは「像の理論」とは異なる意味の考え方を提供します。それは研究者たちによって「意味の使用説 (Gebrauchstheorie der Bedeutung / use theory of meaning)」と呼ばれる考えで、それは『探究』では次のように登場しています。

「意味」という語が使われる [...] ほとんどの場合について、この語は次のように説明できる。
単語の意味とは、言語におけるその使われ方である、と (『探究』43節)。

大工の言語ゲームを例にとるなら、「台石！」という言葉は、石材を持ってこさせる命令として使われているのであり、それがその言葉の意味だと言えるだろう、ということです。つまり言葉にあるのは現実の描写機能だけではないのです。ヴィトゲンシュタインは「言語ゲームの多様性

を見て取れ」という言葉に続け、記述以外に、命令、報告、芝居、謎かけ、ジョーク、翻訳、依頼、感謝、悪態、挨拶、祈り、といった使い方があることを示しています（『探究』23節）。事実の記述は言語の重要な機能ではあるものの、あくまでもその中の一つです。チェス、トランプ、テニスなど、ゲームが多様であり、すべてのゲームに共通する一つの本質がないのと同じように、言語ゲームも多様なのです⁴⁾。現実描写の言語ゲームでさえ、一通りでない可能性があります。見かけの類似に惑わされ、言語ゲームの差異や多様性を見逃し、すべてを一つの観点に無理に押し込めようとするとき、異なるものの混同によって哲学の問題が生まれる、とヴィトゲンシュタインは考えるのです。

3. 規則に従うとはどういうことか

さて、ゲームにはそれを支える規則があります。同様に（ゲームに譬えられる）言語にも規則があり、言葉を理解し操るには、多くの言語規則を習得せねばならないでしょう。ヴィトゲンシュタインはこの規則の概念を重視しますが、それについて或る哲学的な問題を見出しています。そのため『探究』では、規則（Regel/rule）についてひととき目立った検討がされます。

問題が生じるのは、規則には多様な解釈の論理的可能性があるからです。ヴィトゲンシュタインは数列の例を用いて、或る状況を想像します。或る生徒が1,000を越えない事例を基に「+2」の計算規則を教えられ、テストも受け、それを習得したと判断されます。すべては順調に見えたのですが、1,000を越えた途端、彼は「+2」の操作を、「1,000、1,004、1,008、…」と続けるのです。彼は思いがけずも、「+2」の規則を、「1,000を越えたら4を足すこと」と理解したようです。生徒に具体的に示されたのは1,000までの計算だったので、与えられた説明は、生徒のような解釈を禁じるものでなかったと言えるかもしれません。そのような解釈を阻止するために、規則の説明をより周到に行っても、イタチごっことなるでしょう。説明は論理的には常に、多様な解釈の可能性に開かれているからです。規則の奇抜な解釈は、他にもいくらかでも想像できるということです。

しかし、もし規則の解釈可能性が常に無限に開いているなら、規則によって意味は定まらないことになります。これは「規則のパラドクス」と呼ばれる問題ですが、ヴィトゲンシュタインは次の指摘によって、この論理的なパラドクスを、実践的に退けます：

我々のパラドクスは、こうであった。「規則は行動の仕方を決定できない。というのも、どんな行動の仕方も、その規則と一致させることができるから。」[…]ここに誤解があることは、私たちがこの思考過程において、解釈に解釈を重ねていることから明らかである。[…]つまりこれによってわかるのは、解釈でない規則把握があるということ、つまり個々の適用ケースにおいて「その規則に従っている」あるいは「それに反している」と我々が呼ぶことに表される規則把握があるということだ。（『探究』201節）

ここでヴィトゲンシュタインが読者に促しているのは、日常言語の実践に立ち戻ることです。実際の言語使用においては、規則の解釈可能性は無限に自由でないという実践的事実を、彼は我々

に想起させているのです⁵⁾。現実の言語ゲームには、それに通じた人々が正しいとみなす仕方、「解釈ではない規則把握」の仕方があります。その把握はその言語ゲームを習得した人々に共有されているもので、そのような一致した把握があるからこそ、規則はその規範性を発揮できるのです。そのような実践的な個々の規則把握にこそ、その規則に正しく従うとはどういうことかが現れます。そのような制約がない「規則」があれば、それは規範性を欠くことになり、規則の体をなさないでしょう。ヴィトゲンシュタインは規則について、さらにこう言います：

「規則に従う」ことは、それゆえ一つの実践である。そして規則に従っていると [単に] 思っていることは、規則に [実際] 従っていることではない。それゆえ規則に「私的に」従うことはできない。さもないと規則に従っていると思っていることが、規則に従っていることと同じになってしまうからだ。(『探究』202 節)

何が規則に正しく従うことかについては、その実践で正しいとされる共有された規則把握が現にあり、それが判断基準となります。そして規則が規範であるためには、正しいと単に私だけが思うことと、実際に正しいとされることの区別が必要です。自分が私的に正しいと思うことが、何であれ正しいなら、規則の規範性が形骸化するからです。そのような規則は——それに従っていると自称する人がいても——もはや規則とは言えないでしょう。規則順守には、個人の判断とは独立の正しさの基準が必要となります⁶⁾。以上のような仕方、後期ヴィトゲンシュタインは、規則に支えられた言語使用の、基本的に公的な性格を取り出しています。

IV 「感覚日記の議論」と心的概念

言語ゲームの実践における規則の公共性を確認しましたが、ここで、次の問題が生まれます。その問題とは、規則順守の公的性格といっても、少なくとも自分の内面——感覚や気分など——を表す言葉については、言葉とその指示対象を結びつけるのは私的な規則でないのか、というものです。この問題に関し、『探究』には「感覚日記の議論」という有名な議論があります：

以下の事例を想像しよう。私は或る感覚が繰り返し起こることを日記につけたい。そのため私はそれを記号「E」と結び付け、その感覚が起こった日にはいつもカレンダーにこの記号を書く。——この記号の定義は言えないことを、最初に述べておこう。——しかし自分自身には、それを一種の直示的定義として与えることはできる！——どうやって？私はその感覚を指し示せるだろうか？——通常の意味で指し示せるのではない。しかし私はその記号を言ったり書いたりし、そのとき私の注意をその感覚に集中する——それをいわば内面で指し示すのだ。[…]
しかし我々の場合、私には正しさの基準がない。ここで人はこう言いたくなるろう：何であれ私に正しく見ることが正しいのである、と。そしてそれはただ、ここでは「正しさ」について語れないということである。(『探究』258 節)

まったく私的な内的対象としての感覚が私に生じるとして、私はその感覚に名前を与えられるのでしょうか。一見それは簡単なことに見えますが、この議論の標準的な解釈によれば、結論は否定的です。なぜならその名前の意味を定める規則は、まさに私的な規則となるからです。私的感覚が生じたとき、それに注意を向けてそれを「E」と定義する、というのですが、この私的取り決めが「E」の定義です。以降、その記録に意味があるとすれば、それは私がこの規則に従って「E」を使う限りのことだと言えるでしょう。ところが私が「E」と記録するとき、私が本当に定義に従っている保証はどこから得られるのでしょうか。想定上、私的な感覚が問題にされているので、私が定義に従っていることを確認する客観的方法はありません。私が気付けないまま、毎回異なる感覚（そもそも何をもって同じ私的感覚であるか——同一性の基準——が不明ですが）を「E」と呼んでも、私が自分で正しいと思っていれば私が正しいことになるでしょう。するとそれは、私が規則に従うというより、むしろ規則が私の判断に合わせられることになるため、この規則は実質的には規範性がないこととなります。そのような規則は規則とは言えないため、結局、注意の集中によって「E」に決まった意味が与えられるとは言えない、という結論が出されるように思われます。

以上の帰結は、具体的には例えば「痛み」に当てはめられます。仮に痛みが「他人には分からない」プライベートな感覚だとして、注意の集中によって、自分の痛みにも名前を付けられるのでしょうか。感覚日記の議論を思い出すなら、私がいつも同じ私的感覚に「痛み」という語を充てているのか、正しさの公的基準がありません。

「痛み」という語の意味が、自分の感覚への注意の集中では与えられないとするなら、それは何を意味するのでしょうか。ヴィトゲンシュタインは「痛み」の意味について、まったく別の角度からの見方を提案します。それは「痛み」の意味を、心の中にでなく、外に見出そうとする方向です。痛みには原初的で自然な振舞いや表情という特徴的な表出があります。人は痛みを感じるとき、呻いたり、泣いたり、痛い部位をかばったりする等の振舞いを見せます。また痛みには通常、怪我や病気といった特徴的原因があります。痛みとはさらに、同情や配慮（ときには疑心暗鬼や冷淡さ）などの特徴的反応を他者から引き出すものでもあります。そういった脈絡の中で、「私は痛い」「彼には痛みがある」といった言葉を使うことが「痛み」の正しい使い方と言えるでしょう。「痛み」という語は、このように振舞いや状況といった外的基準を手掛かりに、使い方の正誤を説明・判断することができます。

「痛み」のような内面的言葉の意味を、外面から捉えるという方向性は、他の心的事象にも当てはめられます。さらには「心そのもの」にも当てはめられることとなります。つまり誰かに心があるということは、プライベートな内面世界の持ち主であるかどうかの問題でなく、表情や身振りを備え、他者とコミュニケーションができる主体であるかどうかの「外面」的問題であるということです。このような考えは、心と身体を分断し、心をプライベートな領域と捉える近代的な心身二元論の考えに対するアンチテーゼだとして、ヴィトゲンシュタインの考えは評価されてきました。（また心的概念の理解を使用の脈絡に求めるこの方向は、言語を現実の像としてしか考えない『論考』的思考への批判でもあります。）しかし他方でそれは心的なものを、振舞いをはじめとする外的なものへ解消する「行動主義」でないかという懸念を生むこともありました。

V 言語ゲームの自然な拡張

1. 二次的意味

心的概念をプライベートな内面という観点からではなく、言語実践の状況や、振舞いや表情といった外的側面を基準に捉えようとする方向性が、後期ヴィトゲンシュタインでは強く示唆されます。しかし、その方向だけから心理的概念を捉え切れるかということ、疑問が残ります。痛みには外面的に捉えられる部分はあるとはいえ、やはりそれに「内面的」要素があることは否定しがたく思われるからです。例えば痛みには、現象的な質感があります。この質感は、表情や振舞い等から——つまり外から——捉えられるとは思われません。痛みに鋭い、鈍い、熱い、冷たい、といった質感を感じることは、痛みが一種、その質感の担い手として心の中に対象化されていることを示すと思われます。ヴィトゲンシュタイン哲学は、そのような「内面」を果たして否定するのでしょうか。この問題を考えるにあたって、『探究』には、異なる観点からの言語使用の考察例があるので、まずそれを取り上げたいと思います。

『探究』は二部構成になっています。第二部を成すのはヴィトゲンシュタインが晩年に作業をしていた原稿で、分量的には第一部の三分の一程度ですが⁷⁾、これが編者たちの判断で、彼の死後『探究』に組み込まれたのです。その判断の適切さをめぐって議論もあるのですが⁸⁾、今回はそれには触れず、第二部は従来通り『探究』の部分という扱いをしたいと思います。その『探究』第二部で一風変わった現象が取り上げられています。

「太った」と「痩せた」という二つの概念を与えられたとして、君はどちらかと言うと「水曜日は太っていて、火曜日は痩せている」と言いたくなるか、それともその逆か。(私は絶対、前者に傾く。) さてここで「太った」と「痩せた」には、日常的なものとは別の意味があるのだろうか。—それらは使われ方が違っている。—とすると私は、本当は別の言葉を使うべきだったのか。もちろんそうでない。—私はこれらの語を(私によく知られた意味で)ここでは使いたい(『探究』第二部 xi 章 (第四版 274 節))。

確かに私にも、水曜日の方が太く感じられます。しかし曜日に太さがあるというのは全く奇妙です。この使用を一つの事象として受け入れるとしても、曜日には形がないため、曜日のどこが太っているか、その外見を指し示して説明することは不可能です。それゆえ曜日に対する「太った」の新しい使い方は、「太った」の通常の使用の同質的な延長で理解できる拡張ではありません。他方、そのような使い方は、「太っている」の通常を理解を前提しているはずで、通常理解がない人が曜日に太さを感じるなどとは言いださないうでしょう。それゆえそれは「二次的意味 (sekundäre Bedeutung / secondary meaning)」での使用だとヴィトゲンシュタインは命名します(『探究』第二部 xi 章 (第四版 276 節))⁹⁾。そのような二次的意味での使用は、規則に訴えるだけで説明できるものではないでしょう。「太った」の通常規則を理解した人でも、二次的意味での使用に理解を示さないことはありえるからです。そのような使用はいかに生じるのかと言うと、

その使用をする人に自然 (spontan) に生じる、としか言いようがないと思われます。それは、通常の意味での使用を学んだ人の中から、合理的根拠なしに生じる使用の成長だと言えるでしょう。そして、それらの言葉を使って言いたいこと——つまりこの場合、水曜日が太いという感覚——は、別の概念を使ってはいずれも表現できない、とヴィトゲンシュタインは言います。「太った」「痩せた」がまさに該当する曜日のイメージに合う言葉だと感じるものであり、ここで使われるべきは、それらの語——あるいは「ぽっちゃり」や「スリム」といったそれらの類語——でなくてはならないのです。

このような使用方法は一見、遊び的に見え、真面目な、あるいは本格的な言語使用ではないと思われるかもしれませんが、しかし実際は、それは最初の印象ほど、本格的な言語使用とかけ離れていないのではないのでしょうか。例えば「a, e, i, o, u」の母音に「色」があると感じる人がいます。これに関してはランボーの「母音」という詩が思い起こされますが、詩的作品が成り立つ程度に、音の色体験には人間の感性に触れる普遍的何かがあるようです。この体験の言語ゲームが依然遊び的だというなら、メロディや和音に「明暗」を感じるケースを挙げることができます。「このメロディは明るい」といった言語使用も、考えてみると実に奇妙です。メロディは聴覚の対象であり、明るさを持たないからです。音に対して本来視覚的である明暗の概念を当てはめることは、曜日に対して本来空間の対象物に相応しい太さ概念を当てはめることと似ています。しかしメロディに明暗を感じることは音楽経験に重要なことで、遊び的な言語使用の域を超えています。別の例として、声や感情に対して「深さ」を感じることもあります。「深い悲しみ」「深い声」といった表現がそれを表しています。声や感情に本来空間的である深さの概念を当てはめることも、曜日に対して太さを当てはめることと似ています。しかし感情に深さを感じることは、感情の言語実践に参加するためには重要なことであり、戯れなどではありません。「悲しみに深さがあるなどナンセンスだ」と言う人がいれば、悲しみの認識に欠如があるとさえ思われます。これらのケースも、語の二次的意味での使用と言えると思われるかもしれませんが、これを見ると、この種の使用は戯れのゲームであるどころか、人間的言語の本格的習得のために、欠かせない使用でないかと思われるでしょう。

二次的意味で語を使用するとき、元々の適用カテゴリーを越え、それまでとはまったく異なるカテゴリーへ使用が拡張します。しかもそれらのカテゴリーの間にどんな類似性があるのか、説明が困難です。しかしカテゴリーを越えた説明しがたい適用であるにも拘わらず、それは「カテゴリー錯誤」だとされません。合理的説明には窮しますが、「深い悲しみ」また「明るい曲」といった言い方によって、他には言いようがないことが的確に表されていると感じます。ここから確認できることの一つは、言語使用は規則によって至る所で規定されているのではないという、我々の言葉に関する重要な事実でしょう。言語使用には規則で統制されている領域も当然あれば、そこから自然に拡張し、それを越えて現れるような領域が——自然言語の原初的な事実として——随所にあるのです。おそらくそのような拡張は、言語学習で身に付いた言語感覚から自然に生まれるのだと思われます。そして我々はそのような(互いに通じ合う、いわば共通感覚的な)言語使用によって、音に明暗があったり、感情に深さがあったりするような、日常的認識世界を作り出している、ということです。ロボットに言語学習させることが可能であるにしても、二次的意

味での使用に見られる、言葉の自然な拡張能力も与えないかぎり、ロボットが自然言語を習得することはできないと思われま

2. 比喩的拡張

水曜日が文字通りに太っているとは言えないことから、二次的意味での言語使用は「比喩的」な言語使用と呼べるように思えます。ところがヴィトゲンシュタインはそれを否定し、二次的意味は「übertragen（比喩的／転義的あるいは隠喩的）」な意味ではないとします。一体どういうことでしょうか。彼の理由は、二次的意味での言語使用は他に言い換えができないから、というものです¹⁰⁾。ヴィトゲンシュタインにあるのは、比喩的表現とは、喩えを介して言いたいことを表す、いわば「間接的」な表現であるから、字義的表現ないし本義的表現に言い換えが可能であるはずだ、という考えだと察せられます。しかし比喩的表現で表せることは字義的表現でも表せる、ということは正しいのでしょうか。例えばかつて、適切な語彙がまだなかったため、机の天板を支える部位を誰かが初めて「脚」と呼んだとします。「脚」が本来、動物や人間の歩行器官を表すものなら、「机の脚」という借用的な表現は比喩的表現でしょう。そしてこの比喩が定着し、いまでは机に対する使用も「脚」の本義の一部となっています。指摘できるのは、この例では当初、机に使われた「脚」は比喩でありながら、それはそのとき適切な言い換えを持たない表現だった、ということです。ヴィトゲンシュタインが、「母音 e は（私にとって）黄色だ」において「黄色」は比喩でないと言うとき、意図されているのは、「黄色」こそが体験のもっとも端的な表現であるから、それは（間接的表現であるはずの）比喩でない、ということだと思われま

*

ここで、(a)「痛みが消える、現れる」といった言い方があるという事実も、思い出したいと思います。痛みは物的姿をもたないので、目に見えて現れたり、消えたりはしません。ではなぜ我々は痛みが「現れる」「消える」などと言うのでしょうか。痛みが比喩的に対象化されており、それに生成・消滅の概念を当てはめることなしに、言いたいことが言えないからでないでしょうか。また(b)（消えたり現れたりする）痛みには質感があり、それは例えば「重い」、「鋭い」、「焼ける」と言った言葉で表されます。しかし痛みには重さもなく、それは鋭利なものでもなく、また燃えもしません。それなのになぜ、痛みに対し、「重い」「鋭い」「焼ける」といった表現を使うのでしょうか。これも「水曜日は太っている」や「このメロディは明るい」と似ていると言えるでしょう。さらには(c)心を「内面」と言い表すことも同じです。内・外は空間的概念ですが、心を内と言うとき、空間的内部——つまり身体的内部——のことを言いたいわけではないからです。その意味で「内」は比喩的と言えるはずで

と呼ぶ限り、これは非『論考』的な記述であり、記述の言語ゲームも多様であることの一例になります。こういった言語使用が、我々の日常言語には——あまり互いに区別されないまま——混じっています。それらは正しく理解されなければ——つまりもともとの使用と二次の意味での使用を混同すれば——様々な哲学問題を生む危険があります。ヴィトゲンシュタインはその危険に敏感です。しかしだからといって、それらの拡張的な言語使用を否定したり消去するわけにはいかないでしょう。実際、私たちの言語使用には、規則では説明しがたい仕方でも自然に生じる「二次の意味」での言語使用が多くあります。そういった使用がなければ、私たちが住む言語的世界は——『論考』ほどでないにせよ——きわめて貧困になるのです。この点を見落とすことは、ヴィトゲンシュタインが目指した我々の日常言語の——とりわけ心的な事柄に関する言説の——展望的理解の妨げになると考えられます。

VI まとめ

二次の意味の概念を痛みなどの心的概念へ適用することは、「内面」に否定的だと一般に解されているヴィトゲンシュタイン哲学の精神に、真っ向から反するのでないか、という疑問があります。私は、その方向がヴィトゲンシュタイン哲学に反するとは、考えていません。様々な心的概念を二次の意味の観点から理解することを、ヴィトゲンシュタイン自身は本格的には行いませんでしたが、そのような展開の方法や可能性は、彼の思想に備わっていると思います。ヴィトゲンシュタインは「違い」を重要視した哲学者です。それゆえ彼は『論考』の、極端な一面性を強要する言語観から、より多様性や違いを重視する『探究』の柔軟な言語観へ、洞察を深めました。しかし言語の比喩的拡張については、ヴィトゲンシュタインはその洞察をさらに発展させるには、もはや時間がなかったのではないかと想像できます。我々自身でその可能性を展開することで、彼の思想解釈および言語自体の理解を深めることができると思います。（また従来のヴィトゲンシュタイン解釈がその可能性を踏まえていないとすれば、それに修正を加えることも、我々の課題だと思います。）ヴィトゲンシュタイン哲学には、まだ展開の余地があると考えられます。

注

†この稿は、筆者が国語の教員免許更新講習「書物をめぐる諸問題」（令和3年度 奈良教育大学、ウェブ形式）を分担した際の講演原稿に基づく。前提知識をもたない聴者を想定し、言葉に関する教養的知識になることを意図して、ヴィトゲンシュタインの言語哲学をテーマに話した。ここに記載するのは、講演原稿の不要な箇所は省き、哲学的に調整を加えたものである。

- 1) ヴィトゲンシュタイン哲学の20世紀における受容の経緯・変遷は、Hacker（1996）に詳しい解説がある。
- 2) この方針のため、解釈のバリエーション——例えば近年アメリカを中心に勢いを広げた、特に前期著作に関して（また連動して後期著作に関して）も）独特な主張をする「治療的解釈」など——には触れずにいる。
- 3) 例えば独我論、哲学の方法、アスペクト等への言及は本稿にはない。表明／表出概念は本稿の方向には

- 本来不可欠だが、それも——見え隠れはするものの——前面には出てこない。
- 4) メンバーすべてが一つの共通点をもつことによって一つの概念が構成されるのではなく、メンバー同士が大小の部分的類似のネットワークによってつながることで一つの概念が成り立っている場合、そのような概念を「家族的類似」概念と呼ぶ。
 - 5) ここには、ヴィトゲンシュタインが常に日常の言語実践を考察の岩盤に据える姿勢の代表的現れがある（他に『探究』第二部 xi 章（第四版 161 節）も参照）。
 - 6) それは言語に内在的な正しさの基準であり、言語とは独立と考えられる——『論考』的な——客観的正しさの基準ではない。
 - 7) 第二部に含まれる各「所見」に番号を付けると、合計 372 節ある（『探究』第四版参照）。
 - 8) これについての私見は、別所で論じたことがある。
 - 9) 二次的意味に関する日本語の論文として、丸田（2007）や山田（2018）が挙げられる。
 - 10) 『探究』第二部 xi 章（第四版 278 節）にあるこの理由は、Wittgenstein（1993: 42-3; 1979: 17）にも見つかる。
 - 11) 机に対する「脚」の適用を、曜日に対する「太い」の適用に比較したが、これは両者の違いを否定するものではない。机に対する「脚」の適用の場合、想定上、たまたま言い換えできる言葉がなかっただけだが、曜日に対する「太い」の適用の場合、言い換えのできなさは偶然ではないと思われるからである。比較の意図は、言い換え可能性の有無で比喻を捉える視点を弱めようとする点にある。

参考文献

- Erbacher, Christian（2020）*Wittgenstein's Heirs and Editors*, Cambridge University Press.
- Hacker, P.M.S.（1996）*Wittgenstein's Place in Twentieth-century Analytic Philosophy*, Blackwell.
- Hark, Michel ter（2011）“The Experience of Meaning and Secondary Use”, in O. Kuusela and M. McGinn eds., *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, Oxford University Press, pp. 499-520.
- McGinn, Marie（1997）*Wittgenstein and the Philosophical Investigations*, Routledge.
- Schulte, Joachim（1992）*Wittgenstein*, trans. W. H. Brenner and J. F. Holley, State University of New York Press.
- Wittgenstein, Ludwig（1922 [1921]）*Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge.（『論理哲学論考』奥雅博訳、大修館書店、1975 年（ウィトゲンシュタイン全集 1）；野矢茂樹訳、岩波文庫、2003 年；他。）
- （1953; 2009, 4th ed）*Philosophical Investigations*, Blackwell.（『哲学探究』藤本隆志訳、大修館書店、1976 年（ウィトゲンシュタイン全集 8）；丘沢静也訳、岩波書店、2013 年；鬼界彰夫訳、講談社、2020 年。）
- （1979 [1929-32]）*Wittgenstein and the Vienna Circle: Conversations Recorded by Friedrich Waismann*, Brian McGuinness ed., Brian McGuinness and Joachim Schulte trans., Blackwell.
- （1993 [1929]）“A Lecture on Ethics”, in *Philosophical Occasions: 1912-1951*, James C. Klagge and Alfred Nordman eds., Hackett, pp.37-44.
- Wright, G. H. von（1993 [1969, 1982]）“Wittgenstein Papers”, in L. Wittgenstein, *Philosophical Occasions 1912-1951*, J. C. Klagge and A. Nordmann eds., Hackett, pp. 480-506.（H. G. フォン・ウリクト「ウィトゲンシュタインの遺稿」飯田隆訳、飯田隆編（1995）『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局、335-374 頁。）
- 飯田隆（1997）『ウィトゲンシュタイン』講談社。
- 丸田健（2007）「レトリックの存在理由——ヴィトゲンシュタインと比喻の諸相」菅野盾樹編『レトリック論を学ぶ人のために』世界思想社、164-188 頁。
- 山田圭一（2018）「言葉の意味の変化をもたらす体験とはどのようなものか」『科学基礎論研究』第 46 巻 第 1 号、1-9 頁。

インターネット上の情報

Memory of the World（世界の記憶）登録申請書（Philosophical Nachlass of Ludwig Wittgenstein）

(http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CI/CI/pdf/mow/nomination_forms/austriacanada_nachlass_eng.pdf)

Wittgenstein Source (ベルゲン大学ヴィトゲンシュタイン・アーカイブ)

(<http://www.wittgensteinsource.org/>)

Abstract

Based on the author's lecture notes, this article aims to give a basic understanding — or a version of it — of Wittgenstein's philosophy by presenting what I take to be its key elements as plainly as possible. With some retouching of the notes, the following points are made in the present article. (1) In the early philosophy of Wittgenstein, there was the “picture theory of language”, which regards language as grounded in extra-linguistic reality, and meaning as given by the correspondence of language to that reality. (2) In his later philosophy, this earlier idea is relinquished, and the grammar of language is thought to be autonomous, with no extra-linguistic grounds. In this phase, meaning is to be found in the use of language. (3) While the later philosophy places emphasis on the rules of language-games, it also recognizes the use of expressions in a “secondary sense”, which is difficult to explain by reference to regular rules. Although consideration of the secondary sense is arguably essential in achieving an overview of the language-games, especially those concerning psychological experiences, this perspective is not fully developed by Wittgenstein. Further examination is therefore necessary for a fuller understanding of Wittgenstein's philosophy and the possible development of its interpretation.

Keywords: use theory of meaning, rule, secondary sense, figurative extension